

百物語

野村胡堂

—

公儀御用の御筆師おふでし、室町三丁目の『小法師甲斐こぼうしかい』は、日本橋一丁目の福用ふくもち、常盤橋ときわばしの速水はやみと相並んで繁昌しましたが、わけても小法師甲斐は室町の五分の一を持つているという家主で、世間体だけはともかくも、大層な勢いでした。

百物語

江戸中に筆屋の数は何百軒あったかわかりませんが、鉛筆も万年筆も無い世の中ですから、これが相当以上にやつて行けたわけ

です。そのうち公儀御用というのが七軒、墨屋が三軒、格式のやかましかつた時代で、たいてい出羽とか但馬とか豊後とか、国名を許されて、暖簾名にしております。

先代の小法師甲斐は昨年の春亡くなり、番頭弟子の祐吉が、家附の娘お小夜と一緒になつて家を継ぎました。祐吉は筆を捨えることは下手ですが、何となく才覚のある男で、先輩の番頭理三郎、左太松を抜き、朋輩にも、親類方にも異存がなくて、二十五の若さで主家の跡取りに直りました。

尤も、先代小法師甲斐には、甲子太郎きねたろうという、今年二十八の伴せがれがあり、四年前から放埒ほうらつが嵩こうじて、勘当同様になつておりますが、

先代の実子には相違なかつたので、妹のお小夜に婿入した祐吉は、暖簾名の『小法師甲斐』を継ぐことだけは遠慮しておりました。

そんな事は、いざれ話の進行につれて判ることです。それより、いきなり事件のクライマックスなる『百物語』のことから、この物語を始めましょう。

「ね、旦那、先代の大旦那が亡くなられてから、もう一年以上経つていてるでしょう。いつまでも湿々していたつて、追善供養の足しになるわけじゃありません。このお盆には一つ、素人芝居でもやつて、町内中を陽気にして、うんと人気を引立てようじやあり

ませんか、憚りながら二枚目と立役には事を欠きませんよ、ヘエ」

町内の油虫、野幫間のような事をして居る赤頭巾の与作が、こんな調子に煽動したのは、六月の末でした。

「今から素人芝居の仕度じや、盆の間に合わないよ、もつと氣のきいた、キヤツキヤツと来るような遊びはないものかね」

祐吉も満更そんな事の嫌いな柄でもありません。

「キヤツキヤツと来るのなら、百物語なんかどんなもので

「何だい、その百物語——てえのは」

「近ごろ大変な流行りですぜ。行燈を二三十持出して燈心を百本入れ、煌々と明るくした部屋で、怪談を始めるんで。話が一つ済

むと燈心を一本引く、十本二十本と燈心を引いて、九十九本引いた後が大変で

「成程ね」

「百本目の燈心を引いて真っ暗にすると、何か怖いことがあると
いう趣向しゅこうなんで」

「百も怪談をやつて居ると、夜が明けるよ、天道さまのカンカン
照るところへ、何が出られるんだ」

祐吉はすっかりお茶らかしております。

「其処そこをその、十にするんで」

百物語

「frm」

「百物語と言う触れ込みで、行燈の代りに燭台を十だけ出しておいて、百匁蠟燭を一本ずつ消して行く、九つ目が大変で」

「百物語の代りに十物語でも、お化けが出てくれるかい」

「日当次第のお化けなんで、灯りなんか幾つだつて構やしません」

「成程ね」

「さんざん怪談を聞かされた挙句あげく、たつた一つ残つた灯を消されると、女子供の騒ぎというものはありませんよ」

「そうだろうな」

「キヤツキヤツと囁かじり付きますよ」

百物語

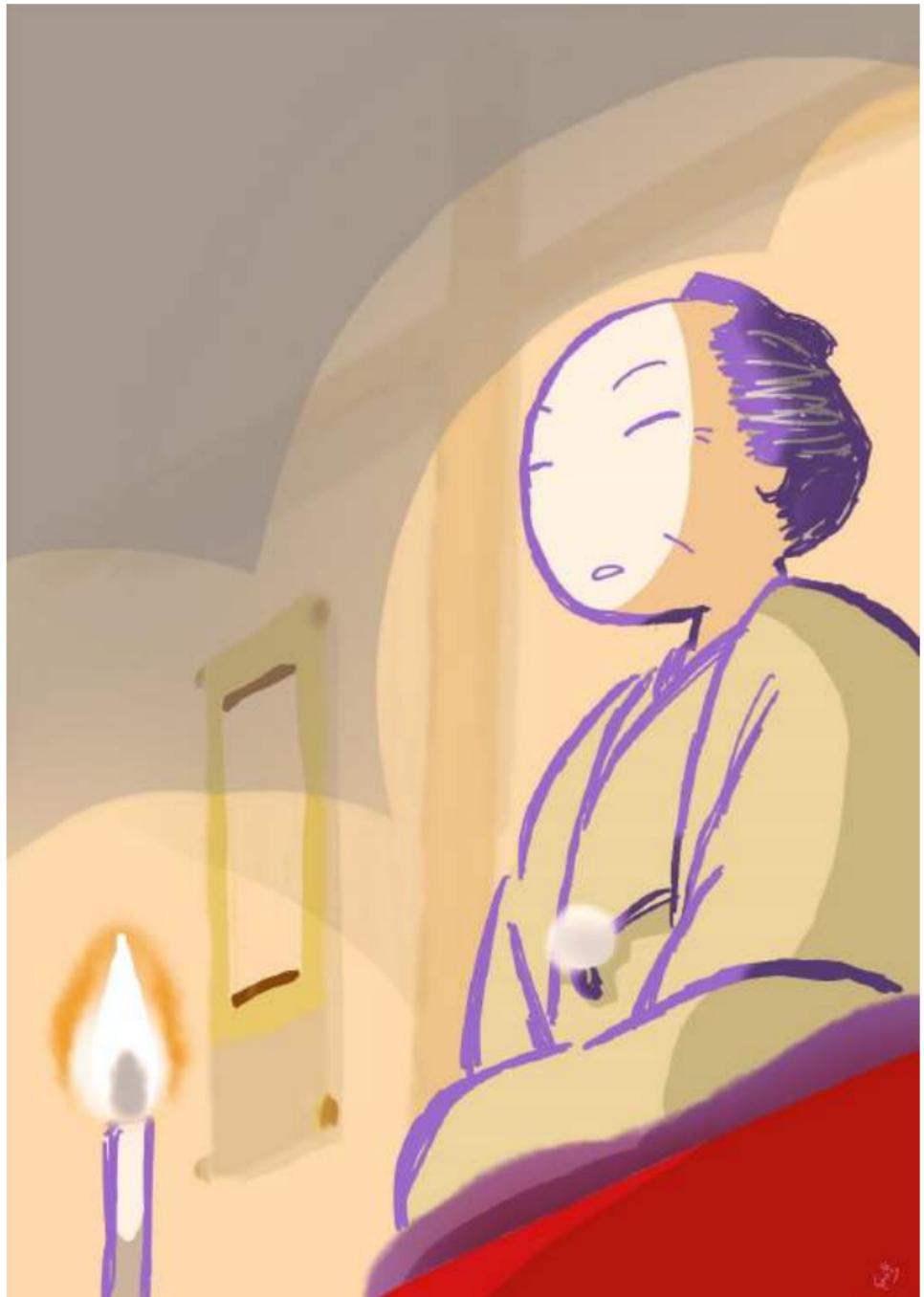
祐吉がその気になれば、鶴の一声でした。

筆屋の『小法師甲斐』、——格式のある家の店から居間を打ち抜いて、三日目には百物語の催もよおしが始められました。

家中の者十六人、それに町内の者が二十人ばかり、女が多くなるように集めたのは、与作の大味噌みそでした。

話は与作が真打しんうちで、町内の尤もつともらしいのが五六人、番頭の左太松と、伴せがれの甲子太郎きねたろうと、出入りの鳶とびの者寅松と、小僧おどが二人——吉之助と宮次が、大切な道具方に廻りました。存分に脅おどかして、町内の娘達をキヤツキヤツと言わせようという計画です。

百物語は、面白可笑しく進行しました。町内の話上手が、次から次と、急拵えの高座に上がって話し、話し終ると、小僧が十基の燭台に点けた蠟燭を、一つずつ消しますが、始めのうちは、その計画の物々しさと、話の馬鹿馬鹿しさに、二た部屋に溢れる聴手も、唯もうゲラゲラと笑うだけです。



©2017 萩 柚月

席の真ん中には、主人の祐吉が、女房のお小夜とそれに番頭の理三郎と野幫間の与作を引付け、大して面白そうもなく聞いて居ります。怪談は三つ、五つ、七つと進みました。あと燭台の灯が二つという時は、さすがに不気味さが加わって、もうゲラゲラ笑う者もありません。

二つの灯のうち一つが消されると、残るのは、高座の右の灯が一つだけ、聴衆はさすがに固唾かたずを呑みました。

「えー、手前の話は青葉ヶ池の怪談、三つ巴ともえの生首がとんだといふ恐ろしい因縁話いんねんばなし、——これは師匠から厳重に申渡された封じ話だ。この話をすると、何かキツと不思議なことがある」

聴衆は完全に牽付けられました。与作の話は、まことに荒唐無稽のものですが、子供たちや女どもに取つては、話の真実性などは問題でなく、たつた一つ残つた燭台の消えるのと、その後にどんな事が起るかの、好奇心と心配で一ぱいだつたのです。

与作の話は巧妙を極めました。時々は仕方まで入つて、さていいよ話が済むと、たつた一つ残つた、最後の灯りも消されてしまいます。

「あッ」

誰やら悲鳴をあげた者があります。

部屋の中は真っ暗、誰がどこに居るかさえ判りません。男達は

この後で出るはずの御馳走酒が楽しみで我慢をし、女たちは、逃出そうにも出口を塞ふさがれて、何うすることも出来ないままに、無氣味さを我慢して、成行を眺めております。

恐怖きょうふが発火点に達した頃、――

「あッ――怖いッ」

誰やらが悲鳴をあげました。どこからともなく、薄うす灯あかりがボーッと射した高座の下のあたり、鼠色の着物を裾長すそながに着た、変な者がヒヨロヒヨロと立つて居るではありませんか。

ゆらりと頭をあげると、一杯に振り冠らんぱつつた乱髪なまりいりの間から、鉛色の顔が少し見えます。

「わーツ」

部屋の中からまた悲鳴があがりました。つづく大混乱、三十人あまりの人間が、出口を探して三方に渦を巻き、互に肩を突き、足を押え、袖を引き、無我夢中の大騒動です。

その騒ぎの中にお化けは、フラフラと歩き出しました。胸のあたりに手を泳がせたお極りのポーズで、高座の前から客席の中へ、何の遠慮もなく乗出して來るのでした。

「あれ、もうお止しよ、冗談じやない」

その声を合図のように、幽靈を照して居た微光がハタと消えました。漆のうるしような闇の中に、鮖桶どじょうおけのような混乱は際限もなくつづく中に、舞台監督は、何やら次の計画に段取を進めている様子です。

ほんの煙草二三服の後、先刻の微光は甦さつきよみがえりました。多分二階の階子段の上のあたりから、泥坊籠燈どろぼうがんどうに風呂敷をかぶせて此方を照しているのでしょう。

それはともかく、二度目の微光に、思わず宙を仰いだ三十六人の眼は、あまりの恐怖に凍こおり付いてしまいました。

「きやーッ」

という悲鳴、二三人目を廻したのもある様子です。

店と仏間と居間とそれを連絡する土間とを打ち抜いたところに、三十六人ぎつしりと詰められておりますが、道具方が工夫を凝して、誰やらが絶えず仏壇の鉢を鳴らし、名香の匂いが、部屋中に瀰漫するように仕組まれてありました。

そればかりではありません。不意に射してきた微光の中に、思わず挙げた眼の前、ちょうど二階の手前、そこばかりは天井が二間半ほどの高さになつているところへ、鼠色の怪物が、黒髪を振り乱し、身体を苦惱に歪めて、蜘蛛の巣に掛つた巨大な昆虫のよう、宙に藻搔もがき苦んでいるのです。

それは実に言いようもない無気味なものでした。高さはちょうど一間ばかり、天井と床との中間で、人間の手の及ばないあたりに、幽靈が虫のように蠢めいて居るので。誰が考え出したか知りませんが、百物語の余興として計画したものなら、これほど素晴らしい工夫はありません。

下の人間どもの混乱は言語に絶しました。女も子供も、大の男までが、芋いもを洗うような騒ぎです。何うかしたら、この中の幾人かは、計画的に騒いで、騒ぎを大きくしているのかも知れません。

幽靈の身体は、空中にキリキリと廻りました。幽靈が宙に身体をねじ曲げると、繩の縫よりが戻つて、またキリキリと反対の方に廻

りました。

「あツ、首、首を吊つてゐる。早くおろせツ」

氣狂い染みた声を張り上げたのは、若主人の祐吉でした。が、天井にいる宙乗りの仕掛けの方の係りは、それさえも一つの威脅と思つたのか、幽靈の身体をあべこべに、二寸、三寸、五寸、一尺と上方へ引上げます。幽靈は蜘蛛くもの糸に釣られた虫のように、クルクルクルと右へ左へ廻りました。

「早くおろせ、——左太松さたまつどんは、首を吊つて居るじやないかツ」

「灯あかりをつけろ、——左太松が死ぬ、——早く、早く」

祐吉は立だ上がりつて必死どなと怒鳴どなりました。やがてその意味が通じたものか、宙に吊つられた幽靈の身体は、少し乱暴に、ドタリと降おろされました。

同時にお勝手から手燭を持った小僧が入つて来て、幾つかの燭台に灯を点けました。

「——」

が、誰も物を言う気力はありません。敷居の上に投出された幽靈の身体は、この時もう死んだ魚のように、長々と伸びていたのです。

三

「親分、幽靈が殺されたって話をお聞きですかえ」

ガラツ八の八五郎が、キナ臭い鼻を持つて来たのは、翌る日の朝でした。

「幽靈が殺された？　へエ――、そいつは変っているネ。人間が殺されると、執念深い奴は幽靈になるそだから、幽靈が殺されたら、人間にでもなるか」

銭形の平次は不景気な朝顔の鉢を縁側に並べて、それでも感心

に咲いてくれた花を眺めているのでした。

「その通りですよ、親分」

八五郎は少しばかり勢きおい込みました。

「サア解らねえ、幽靈の一軸じくを殺して飲んだと言つたような手数のかかる洒落しゃれじやあるまいな」

平次はまだ本気になりません。

「じれつたいネ、そんな氣楽な話じやありませんよ。室町三丁目の筆屋ふでや、小法師こほう甲斐しかいの家で百物語をやつて居ると、大詰おおづめに幽靈が

されて人間になつたには違げえねえ。いつたいその幽靈は誰だつたんだ

「番頭の左太松という二十七の若い男、——そいつが百物語が済んで、灯が皆んな消えるのを合図に、芝居の幽靈の装束しょうぞくで出て来て、あつと言わせる趣向しゅこうだつたんで——」

「フーム」

「出て来てアツと言わせたまでは筋書通りだつた。が、いざ宙乗ちゅうのりとなつた時、腰へ結ぶ筈の繩が頸くびに巻き付いて、宙乗りが首吊くびつりになつたそ�で」

「少し変だな、八」

「自分で頸を縊る氣でもなきや、そんな馬鹿な事をするわけはありません」

「頸を縊るのに、そんな手数な装束をして、皆んなの前で恥を曝さらすわけはねえ」

「だから変じやありませんか、ね、親分」

「もう少し順序を立てて、詳くわしく話して見るがいい。そいつは飛んだ面白いことかも知れないぜ」

平次の職業意識はようやく発火点に達しました。注意が朝顔から離れると、ガラツ八の方にグイと身体をねじ向けます。

「詳くわしくも手短かにも、それつきりで、——常盤橋の猪之吉親分

が行つて、夜つびて幽靈殺しを搜している様子ですよ」

「猪之吉兄哥なら、強引に行くだろう、誰を縛つたんだ」

「第一番に縛られたのは先代小法師甲斐の伴甲子太郎、親父の甲斐きねが生きているうちは、勘当同様で出入りの出来なかつた男だ——

——こいつが幽靈の宙乗りに手伝う役だつたそうで、二階から射す

灯の消えてしまつた時、天井からスルスルと下がつて来る縄を、

幽靈の腰の環かんに引っ掛けて結ぶ筈だつたが、どう間違えたか、幽

靈になつた左太松の首へ引掛けて結んでしまつた、——恐ろしく

そそつかしい野郎で。合図と一緒に、二階に居る鳶とびの者の寅松とらまつと、

吉之助、宮次の小僧が二人、梁はりへ通した縄の端っこを、滅茶滅茶めちゃめちゃ

に引っ張つた

「」

百物語

「左太松の幽靈野郎は、首に縄をつけたまま宙に吊上げられて、声も立てずに死んでしまったそうですよ。若主人の祐吉が氣が付いて、下へ降ろさせた時はもう息もなかつた。尤もすぐ手が廻つて、水でも呑ませるとか、手足を動かすとか、心得のある者が手当をしたら、息を吹返したかも知れないが、三十六人という多勢の人間が居る癖に、そこまで気のつくのは一人もなかつた。髪を振り乱して——こいつは尤も鬘くせだそ�だが——泡を吹いて敷居際かづらに引っくり返つた幽靈を見ると、しばらくは手をつける者もな

かつたそうで

「誰が一番先に介抱したんだ」

かいほう
ゆうきち

「それも若主人の祐吉ですよ。女子供は逃出してしまったし、他の者は面喰めんくらって何にも出来なかつたそうです」

「それつきりかい」

と平次。

「もう少し突つ込んで聞出そうと思つたが、猪之吉親分がイヤな顔をするから、いい加減にして引揚げて来ましたよ」

「そいつは惜おしかつたね。滅多に人の縄張りに手を出す俺じやね

平次はひどく好奇心を煽られた様子ですが、きっかけがないと、進んで乗出すわけにも行きません。

四

事件はそれつきり、平次の手から遠く離れてしまいそうでした。が、親分的好奇心の燃え立つのを見ると、ガラツ八の八五郎は室町の『小法師』へ行つて、その良い鼻を働かせ、とうとう番頭の理三郎をおびき出してしまいました。

「番頭さん、そんなに屈託くつたくしているより、錢形の親分にでも相談

して見ちやどうだい。自慢じやねえが、親分は江戸開府以来とい
われる捕物の名人だ。本当に罪のないものなら、きっと助けて下
さるに違げえねえ」

「そうでしようか、錢形の親分さんは、若旦那の甲子太郎様を助
けて下さるでしようか」

「まア行つて見るがいい」

「常盤橋の親分さんに悪いようなことはないでしようか」

「そんな事を言つてた日にや、甲子太郎の口書拇指くちがきぼいん印を取られて、
話が面倒になるぜ」

「それじや、錢形の親分さんにお引合せ下さい」

四十男の理三郎は、用心深い代りに、いざとなると性急でした。

八五郎を案内に、神田の平次の家へ来たのは、事件があつてから三日目の昼過ぎ。

「親分、小法師の番頭さんに逢つてやつて下さい。若旦那の甲子太郎を助ける氣で、夢中ですから」

八五郎は一ぱし手柄のつもりで、頸あごを撫でてあります。

「馬鹿野郎、つまらねえことをしやがる、猪之吉兄哥はいい心持じやあるめえ」

そんな事を言いながら、この事件の魅力はかなり強く平次を誘ゆう惑わくします。

「そう言わずに親分さん、若旦那を助けてやつて下さい。先代の大旦那が亡くなる時、この私を枕許に呼んで、——甲子太郎の馬鹿が直るように、何とか意見をしてくれ、決して憎くて勘当をしたわけじやない。心掛さえ世間並になれば、この小法師甲斐の跡めを継がせてやるもの——そう仰しやつて涙を流しました。世上の思わく、親類の義理、勘当したと言つても、大旦那は心から甲子太郎さんを可愛がつていたのでござります」

「」

番頭の理三郎が、平次の前にキチンと手をついて、こう口説い
て行くのを、平次は途方に暮れた形で見詰めて居ります。

「若旦那の甲子太郎様は、御大家の坊つちやんらしい、我儘な方で、ずいぶん道楽もしましたが、人などを殺すような、そんな悪い方じやございません。万一無実の罪で処刑おしおきを受けるようなことになつては、先代大旦那様から呉々くれぐれも頼まれたこの私が済みません。親分さん、お願ひ——どうぞ、若旦那を助けてやつて下さい」

理三郎は涙さえ流して、本当に平次を伏し拝むのです。

「なるほど、お前さんのそう言うのも尤もだ。何とかしてやりたいが、確かな証拠たしがあつて、猪之吉兄哥が縛つて行つたものを、いきなり飛出して助けるわけには行かねえ、——こうしようじゃないか、お前さんからもう少し詳くわしい話を聞いた上、八丁堀の旦

那方のお言葉でも頂いて、それから乗出して行くとしようじやないか」

「どんな事でも申します、親分さん」

「それじや第一番に、——今の主人の祐吉さんを、誰が小法師の
跡取に直したんだ」

「親類方でございますが——」

「——が、何うしたんだ。奥歯に物の挿まつたような事を言つて
居ちや、気の毒だが若旦那は助からねえよ」

「大旦那様が亡くなると、番頭の左太松さたまつさんと祐吉めあわさんの二人の
うち、一人をお嬢様と娶合せて、跡取にするということになりま

したが、その時左太松どんはお国という女と懇ろになつていて、

お嬢さんの聟むこは、祐吉と定まりました』

「お嬢さんや左太松には不服はなかつたのだね」

「お嬢さんも、左太松の方が好きだつたかも解りませんが、お国と一緒に、外へ世帯を持つて居ちや、どうすることも出来ません。それに左太松もお嬢さんの聟むこには、朋輩ほうばいの祐吉の方がいいと、自分の口から勧めた位でござります」

「それじゃ、何方にも怨うらみはないわけだな」

「怨どころか、今の若主人の祐吉様に取つては、殺された左太松は恩人のようなものでござります。あれほどの大身代を、左太松

の一言で継^ついだようなものですから」

「若主人の祐吉と、家附のお小夜さんとの間はどうだ」

「別に、悪くはありませんようで」

理三郎の言葉には、何となく歯切れの悪さがあります。

「お国とかいうのが、今でも左太松と一緒に居るのかい」

「一緒に居りますが——」

「判^{はつきり}然物を言つてくれ、つまらない事を隠し立てすると、助かる者も助からないことになるよ」

平次はもどかしそうにきめ付けました。

という女が悪うござります

「何うしたというのだ」

「左太松をあんなに夢中にさせて、小法師こぼうしの跡とりになれるのまで棒に振らせながら、近頃は——」

「

「申上げてしまします。悪い女で——へエ、若旦那まとの甲子太郎きねたろう様に、何彼とうるさく附き纏まといりますようで」

理三郎は頸筋くびすじの冷汗ばかり拭いて居ります。

「で?」

申します

「フーム

「若旦那が幽靈の宙乗りちゅうのを手伝う役割のあつたことを思い出して、あわてて部屋へ帰つて来ると、幽靈はもう宙乗りをしていたんだと、——こう申します」

「すると、幽靈が宙乗りを始めてから甲子太郎はあの部屋へ入つたんだね」

「へエ——」

百物語

「若旦那が入つて来たのを、誰も気の付いた者はなかつたのかい」と平次。

「何しろ、幽靈が出るともう、あのキャツキャツという騒ぎです。
若旦那の一人くらい、出ても入つても、気のつく者がある筈もございません」

「それでは、幽靈の頸^{くび}へ縄を掛けたのが、甲子太郎でないという
証拠は一つもない」

「親分さん」

「お前さんはどこに居たんだ」

「若主人の祐吉^{ゆうきち}様御夫婦や与作さんと一緒に、部屋の真ん中に居
りました」

「幽靈のすぐ側^{そば}かい」

「いえ、少し離れて居りましたが」

「話はまた戻るが、甲子太郎とお国が納戸なんどで話しているのを、誰と誰が知つて居たんだ」

「私は薄々存じて居りました。日の暮れる前に、店で耳打をしているのを聞きましたんで、へエ——」

理三郎は少し極り悪そうに小鬢こびんを搔きます。

「外ほかに聞いた者はないだろうな」

「小僧が二人位、小耳に挿はさんだかもわかりません」

「誰と誰だ」

「吉之助と宮次だったようで」

「それつ切りか」

「へエ——」

「すると、若旦那の甲子太郎は、お国と左太松に怨があつたわけだね」

平次は外の事を言つております。

「でも親分」

理三郎はあわてて両手を振りました。平次の口調では、理三郎が希ねがつたとはあべこべに、形勢は甲子太郎に悪くなるばかりです。

その日のうちに、平次は八丁堀に飛んで行つて、与力の 笹野新三郎に逢い、事件の外貌をもういちど調べ直した上、常盤橋の猪之吉を訪ねて、一応渡りをつけました。

「いいとも、銭形の兄哥が乗出し�や、すぐ目鼻がつくよ」

少し持て余し氣味の猪之吉は、思いの外手軽に承知をしてくれます。甲子太郎を縛つたものの、本人は頑強に口を緘^{つぐ}む上、証拠が一つもなくて、実は内々閉口して居たのでした。

「それじや、室町^{むろまち}へ行つて見るとしよう。兄哥も附き合つてくれ

平次は猪之吉を先に立てて室町の小法師甲斐^{こほうしがい}に乗込みました。

「あ、親分さん」

素知らぬ顔で迎えた理三郎に案内させて、まず一とわたり家の間取りを見せてもらいます。

公儀御用の御筆屋おふでやで、店と言つてもそんなに品がおいてあるわけではなく、小僧が三人、番頭ばんとうが一人、しょんぼり坐つて、忌中きちゅうらしく垂れ籠たたきこめておりました。

次は八畳の居間、六畳の仏間、その端はじつこまで土間が喰い込んで、店二階の階段は、その土間からすぐ登れるようになつて居ります。土間の上から居間半分ほどへかけては二階がなく、天井までは二間半以上もあるでしょう。一本の巖乘がんじょうな梁はりが、その中程を

貫通して居るのを見ると、幽靈を宙乗りさせる趣向^{しゅこう}が、誰にでも浮びそうです。この梁へ綱をかけて、二階の手摺^{てすり}から引上げると、幽靈の一人位はわけもなく宙乗りさせられるでしょう。

平次はまず若主人の祐吉に逢いました。

「親分、御苦勞様で」

二十五というにしては、立派な貫禄^{かんろく}です。色白の柔軟な顔立ち、ちよつと微笑すると、若い娘のような可愛らしい顔になりますが、性根はなかなか確^{しつか}りものらしく、言葉の角々^{すみずみ}もはつきりして、大家^けの主人らしさに申分もありません。

「飛んだことでしたな」

「左太松どんが可哀想でなりません。私より二つ年上で、本来ならば——」

言いかけて祐吉は口をつぐみました。小僧が二人——吉之助と宮次が縁側を通つたのです。

「本来ならば、左太松がこの家の跡やあとを繼ぐ筈つだつたと言うのでしよう」

「いや

祐吉はちよつと絶句ぜつくしました。うつかり言い過ぎたことに気が

付いたのでしよう。

いろいろ訊ねて見ましたが、無口なのと、ひどく用心している

らしいので、主人の祐吉からは何にも引出せません。

続いて逢ったのは家附の娘で祐吉の女房お小夜さよ、これはすっかり怯えて、何を訊いてもオロオロするばかりです。その上恐怖と心配に屈託くったくして、眼の下を黒くしている有様。美しいという評判の女房振りも、一向冴えさないのは物足りないことでした。

「親分さん、左太松を殺したのは、兄じやございません。何とか助けてやつて下さい、——兄はそんな悪いことの出来る人ではないのです」

「でも動かぬ証拠がありますよ」

を激発するつもりにしても、これはまたあんまりな言葉です。

「証拠はいくらあつても、——この下手人ばかりは兄じやございません」

妙に断乎だんことした調子です。

「それじや、本当の下手人を御新造さんは知つていなさるんです
ね」

「いえ、飛んでもない」

お小夜はひどく驚きました。

「御新造さん、左太松を怨んでいる者がある筈ですが、——そい
つは誰ですか」

平次はこう言いながら、お小夜の顔に去来する感情の動きをジツと見て居ります。

「私は、何にも——」

お小夜は見透みすかされるのが怖こわかつた様子で、頑かたくなに首を振ります。

「左太松は可哀想じやありませんか。遊事と言つても、幽靈になつたまま殺されちや」

「——

お小夜が、死んだ左太松の方を好きだつた——と番頭の理三郎は明らかには言わなかつたにしても、理三郎の口裏と、お小夜の

絶望的な顔色から、平次が見抜いてしまつたのに何の不思議もありません。

「これは兄さんの甲子太郎さんを助けるのに、大切なことですよ。よく分別を定めて返事をして下さい」

「」

何やら襲いかかる圧迫感あっぱくかんにお小夜は肩をすくめました。

「死んだ左太松が、お国と一緒になる前、御新造さんと約束をしたことがありますやしませんか」

「と、飛んでもない」

お小夜の怯え抜いた顔を見ると、これ以上は平次も追及が出来

おび

なくなります。

ようやく解放されて、いそいそと奥へ行くお小夜の後姿を見送つて、

「あの女はまだいろいろの事を知っているぜ、——あんなにしょらしくちや、無理にも口を割る術てはない」

平次は淋しそうでした。

「親分、矢張り甲子太郎でしそうか

とガラツ八。

「いや、まだ解らないよ、俺はお国を当つて見よう

「あっしは？ 親分」

「左太松の身持をよく調べてくれ」

「へエ——」

「どこを何う手繕たぐつたものか、ガラツ八は少し覚束おぼつかない様子です。口の軽そうな奉公人を当つて見るがいい、それから、近所の衆が飛んだことを知つているものだ」

平次はそう言い捨てて出て行きました。

六

左太松とお国は、室町むろまち三丁目の裏、小法師の店からあまり遠く

ないところに、形ばかりの世帯を張つておりました。

「まあ、錢形の親分さん」

平次の入つて来るのを見ると、居崩れた膝を直して、あわてて浴衣の襟をかき合せます。さすがに仏壇からは、線香の匂い——。お国は二十二三の商売人上がりらしい女ですが、白粉つ氣のない、少し打ち萎れたところなど、お小夜の品の良いのに比べると、恐ろしく仇つぽく見えます。

「氣の毒なことだつたな、お国」

平次は上り框に腰をおろしました。

うしようもないじやありませんか」

「小法師で何とか手当をしてくれるだろうよ、あまりクヨクヨしたものじやあるまい」

「飛んでもない。あの若主人が、死んだ番頭の配偶つれあいに、百も出すものですか。あんな因業いんごうな人間はありやしません」

「そんなことはあるまいよ」

「何とか身の振り方の付くようと、近所の方が言つて下さるから、私の口からそう言うのも変だけれど、思召しだけでも聞いておこうと思うと、剣もほろろの挨拶じやありませんか」

平次も何か予想外なものを感じました。

「左太松には散々な目に逢っているから、香奠の外には百も出せない——あべこべに、千両近い金を返して貰いたい位のものだ、とこう言うんです」

「千両？」

「あの若主人の祐吉の野郎が言うんです、——尤も家の人は、ときどき若主人に無心を言つて居たのは、私も知らないじやありません。でも、家の人に言わせると、あの身代を継がせて、旦那面をさせてやつたのは、皆んなこの俺のお蔭じやないか、お嬢さんのお小夜さんだつて、俺がその気になりや、祐吉なんかと一緒に

なるものか——つて

「それは左太松の言い分か」

平次はお国の言葉の重大さに驚いたのです。

「え、家の人に殺したんだって、誰の仕業しわざか解るものですか、——

——若旦なんど那の甲子太郎さんが縛られて行つたけれど、若旦なんど那はあの時納戸さいくで私と話していたんです。そんな細工さいくの出来るわけはありません

りやしません」

どこまで発展するかも解らないお国の呪のろいを聞き捨てて、平次は出入りの鳶頭かしらの家へ行つて見ました。これは寅松という五十男。「おや、錢形の親分さん、御苦勞様で、——あの幽靈殺しの一件

でございましょう、——飛んだ人騒がせで

そう言つた滑らかな調子で、何でも話してくれますが、『その晩頬まれて、二人の小僧と一緒に、二階に陣取り、幽靈が出るのをきつかけに、梁の上を潜らした丈夫な綱を下へおろし、二階から幽靈だけを照して、いた龕燈仕掛けの灯を暗くして、幽靈の腰に綱をつけるのを待ち、下からの合図と一緒に、一生懸命引上げた』という外には何にもありません。

「お店のことをそう言つちや何ですが、百物語なんて、本当に馬鹿なことをやつたものですよ。素人芝居とか、涼船を出して踊るとか、もう少し知恵のある遊びもあつたでしょうが——」

寅松の言うことはたつたこれだけ、平次は張合のない心持でもういちど小法師へ引揚げました。

七

「親分、いろいろのことが判りましたよ」

いそいそと迎えてくれたのは八五郎でした。

「どんな事が判つたんだ」

「左太松さたまつは、若主人の祐吉を強請ゆすつていたことが判つたんで

「frm、そいつはありそな事だな」

二人はグルリと裏へ廻つて、ガラツ八の口は平次の耳に囁くの
です。

「何でも、祐吉が跡を取つてから、三百や五百の金は左太松へ
やつた筈だつて」

「誰がそんな事を言うんだ」

「奉公人同士はそんな事ならすぐ嗅ぎつけますよ」

「フーム」

「それから、お国と甲子太郎きねたろうが、納戸などで逢引あいびきの約束をしていたの
を、小僧が聞いたかも知れないと、番頭が言つていたでしょう」

「ウム、それが何うした」

「**小僧**のうちに、若主人の間者をつとめて居るものがあります

「誰だ、そいつは？」

「それが解らないんで」

八五郎の探索たんさくもここまで来てハタと行詰りました。

それから一人一人当つて見ましたが、何の得るところもありません。ただ、梁はりを通して降りて来た綱を、下で待ち受けた下手人わなこしらが、咄嗟とっさの間に罠わなを拵え、それを幽靈になつた左太松の首にはめ込んで、二階へ合図をしたということが解つただけです。罠はなかなか巧妙に出来て居りますから、それを闇くらの中で咄嗟の間に拵

えるのは、容易ならぬ手際を要するわけです。

平次は綱を見せて貰いましたが、罠はもう解いてしまつて、その時の様子を見た人達の話で想像するだけです。もう一つ、綱の下がつて来た場所は、若主人とお小夜と理三郎と与作とが一団になつて居たところからは、少し遠過ぎて、よしや混雜の中を巧みに泳ぎ抜けたとしても、罠を作つて合図をして元の座に帰るのは、なかなかの困難があるわけです。

「親分、もう縛りましようか」

とガラツ八。

「決つてるじやありませんか、下手人は若主人の祐吉——」

「どうして、そんな事を考えたんだ」

「女房のお小夜はまだ左太松に未練みれんがあるし、祐吉は去年から五百両も左太松に強ゆ請すされているとしたら、祐吉が猫の子のようなおとなしい男でも、フラフラとやりたくなりますよ」

「俺もそれを考えないじやないが、祐吉のいた場所と、幽靈のいた場所は遠過ぎる。中には二十人わなもの人が渦を巻いていたんだぜ。その中を分けて行つて、罠わなを拵えて幽靈を吊つらせて、元の場所へ帰られるかな、それも煙草一服の間まだ——」

ろへ行つて、その晩のことを詳くわしく話させて見ました。

「旦那は私どものところを動きませんよ。幽霊を見て騒いだのは、女子供や近所の衆で、私どもは種を知つてゐるから、笑いながら眺めていました。へエ、一人でも動けば知れたわけで——」

これでは、祐吉を疑いようはありません。

平次はガラツ八を一人残して、一たん小法師を立出たちいでました。が、念のため常盤橋ときわの猪之吉を訪ねて、番屋に抛ほうり込んである、

若旦那の甲子太郎に逢つて見る気になりました。

平次の問いは率直で簡単でした。

「誰も知りやしません。知らせたくもなかつたんです」

甲子太郎は、道楽者のくせに、純情家らしい男でした。もう二十七八にもなるでしようが、大家の坊つちやんらしく、若々しいところがあつて、妹のお小夜に似た品のよさと、勘当息子らしい捨鉢なところが、妙な不調和と魅力になつてゐるのです。

「納戸へ入つたのは何時だえ」

「馬鹿な怪談の真つ最中でした。蠟燭は二本位灯いて居たでしょ

う

百物語

「納戸を出たのは?」

「幽靈が宙乗りをしている時です、——あんまり騒ぎがひどいんで、ツイ出て見たんです」

「その間納戸から一度も出なかつたんだね」

「手洗に一度出ましたよ」

「何方が」

「私も、お国も。私が先でお国は後でした」

「騒ぎが始まつてからか」

「いえ、その前で——いや、ちょうど騒ぎが始まつた時から」

「これだけでは、何の手掛りになりそうもありません。」

「お前さんは、お国と一緒になるつもりだつたのかい」

「飛んでもない、——仲人なこうどはなくても、あれは左太松の女房のよ
うなもので」

「その左太松の女房と逢引をしちや、悪かろう」

「へエ——、でも、近頃左太松の仕打ちよつとがひどいから、別れ話を持
出している、その相談あいだんをしたいから、一寸顔ちよつとをかしてくれという
んで」

「で、相談に乗つたのか」

平次に問詰められて、甲子太郎はポリ。ポリ。小鬢こびんを搔かきながら、
弁解めかしくこんな事を言うのです。

「私は幽霊の仕掛けの宙乗りに一と役持つて居るからイヤだと

言うのに、お国は、あんな馬鹿な事は馬鹿に任せて置きましょう
——つて、私を納戸から離さなかつたんです

八

甲子太郎の縄を解いてやるよう、平次は猪之吉を説き伏せて、
室町の小法師に帰つて来たのは、その晩の亥刻いのきつ少よし前でした。
「親分、困つたことになりましたよ」

「どうした、八」

八五郎の様子はただ事ではありません。

「小僧の宮次みやじが見えなくなつたんです」

「えツ」

十四五の小柄な可愛らしい小僧は、平次も幾度か物を訊いた記憶おくがあります。

「旦那と一緒に外へ出たんだが、帰つたのは旦那だけで、宮次はツイ其処で見えなくなつたと言うんで——」

「フーム」

平次は八五郎の説明を聞き流して、主人の祐吉に逢いました。

「錢形の親分、困つたことになりました

「ね、御主人、隠さずに言つて下さい。あの宮次という小僧に、格別目をかけてやつて居たでしよう」

「と言うと——？」

「この大家の跡を取つて、まだ一年にもならない旦那が、店に一人の腹心ふくしんが欲しかったのも無理はありません」

「親分、そう言われると面白いが、時々こづかい小遣こづかいをやつて、いろんな事を聞いて居ましたよ

と祐吉。

「例えは、甲子太郎とお国の逢引の相談といつたような事を——」

祐吉は黙りこくつてしましました。恐れ入つた姿です。それを聞くとガラツ八は平次の袖を引いて、変な目配せをします。甲子太郎とお国の逢引を知つてゐる者は、下手人に違ひないと想い込んで居るのでしょう。

「すると、あの宮次という小僧は、錢さえ貰えば、どんな事でもする人間だつたのですね」

「そんな事もないでしよう、私の言うのは、主人の言い付けだから

ら」

「仲間や朋輩のことを告口するには、忠義とは別のものですよ。一度にどれ位ずつ小遣をやつたんです」

「子供の事だから、十二文やつたり、百文やつたり、一朱握らせたり」

「そいつは結構な羨^{しつけ}じやありませんね」

「でも」

平次はもうこれ以上の追及を断念しました。小僧に金までやつて、告口^{つげぐち}を奨励^{しょうれい}するような主人に、あまり大きな仕事は出来そうもないと見たのでしょう。

「その宮次と何処へ行つたんです」

「一寸永代まで——」

百物語

と祐吉^{ゆうきち}。

「川へ突き落したんじやありませんか、親分」

ガラツ八は平次の耳に囁きます。が、その声は、五六間先まで聞えそうです。

「飛んでもない、そんな事をするものですか。宮次はツイ其処まで私と一緒に歩いて来ましたよ。門口を入つて、振り返ると、姿が見えなかつたので、びっくりしたようなわけで——」

祐吉のくどくどと説明するのを、平次はもう聞いてはいませんでした。

「八、大変なことになるかも知れない。来い」

呆気に取られる祐吉を後に飛出す平次。八五郎がその後へ続い

たことは言う迄もありません。

「何処へ親分」

「シツ」

そつと潜り込んだのは、室町の裏路地むろまち、今日いちど訪ねたお国の家の前です。

「御免よ」

「」

「ちよいと起きて貰おうか」

「」

平次はそう言いながら、入口の戸をガタガタさせます。

「あ、どなた?——もう休んだんですが、——明日にして下さいません?」

お国の寝ぼけたような声です。

「平次だよ、手間は取らせない、開けてくんな

「まあ、錢形の親分さん」

何やらガタピシやつて、ようやく戸を開けると、灯を後に背よ
負なまつておりますが、燃え立つような艶めくお国の姿が、入口一ぱ
イに立ちはだかります。

「来いッ」

その豊満^{ほうまん}な腕を取つて平次はグイと引くと、

「あれーツ」

闇^{つんざ}を劈く嬌声^{きょうせい}と共に、女は敷居際^{くずお}に崩折れます。

「御用だぞツ」

「親分さん、飛んでもない。私は何んにも悪い事はしない」

「八、女を頼むぞ」

平次は何やら心せく様子で、お国の身体を、後ろに続くガラツ八に任せて、ツイと家の中へ入りました。

「合点ツ」

巧みにかわして、脇の下からツイと背後に抜けました。

「馬鹿だねエ」

目つぶしの嬌笑。タジタジとする八五郎の手を逃れて、女は一
朶の焰のようだほのほのと、夜の街へ飛出します。

平次は併しそれに構つては居られませんでした。飛込んで狭い
家の中を一ト目。

「居ない、——遅かつたか」

思わず立ちすくみましたが、次の瞬間、恐ろしいスピードで、
お勝手から押入から、便所まで見ました。

「居ない、——そんな筈はないが」

もう一度くり返して家やさが捜しするところへ、

「親分、骨を折らせやがつたぜ」

女を滅茶滅茶に縛つて、八五郎は帰つて来ました。

「八、ここへ女をつれて来い。小僧は死んでいるぞ」

「えツ」

八五郎も襲われるような心持で、縛つた女と一緒に入つて来ました。行燈の最初の灯そそが女の顔に射すと、平次の眼は早くもその瞳が、部屋の一方そそに注ぐのを見て取つたのです。

「ここだ、畳の隙間に埃ほこりのあるのに気が付かなかつたとは、何と

平次は矢庭^{やにわ}に部屋の隅の畳を一枚起すと、床板を三枚ばかり引つ剥しました。

「あッ」

中から引出したのは、蒲団に包んでキリキリと縛った小僧の身体。

解く手も遅しと、引出して見ると、幸いまだ息だけは通つております。

「八、水だ、水だ

「おッ」

縛った女を突き飛ばしておいて、お勝手から持つて来た水を、

虫の息の小僧の口に注ぎ入れるのでした。

「やい女ツ、——この小僧を殺したつて、亭主殺しの罪は隠し切れないとぞ」

平次もツイ、この女のあまりの太々しさに、日頃にもない叱咤あてぶつを浴びせます。

×

×

お国はその晩のうちに送られて、甲子太郎きねたろうは許されました。

いろいろの事が判りました。

中でも諸人を驚かしたのは、もう一年も前のこと、祐吉ゆうきちは金づくでお国に頼み込み、左太松さとうを誘つて世帯を持たせ、自分はお小

夜の歓心を買つて小法師の跡を襲いだ上、いろいろ小細工をして、先代と甲子太郎までも遠ざけていたことです。

親類相談の上、少しばかりの分配わけまえをやつて祐吉を分家させ、改

めて実子の甲子太郎が入つて小法師甲斐あらたの後を襲ぎました。

それはずっと後のこと。

「親分、判らない事ばかりだ。お国はどうしてあんな事をやらかしたんでしょう」

ガラツ八は絵解きをせがみます。

「何でもないよ、——左太松がお小夜に未練みれんがあるのを知つて、お国はあんな気になつたのさ。嫉妬やきもちだけじやない、甲子太郎を取

込んで、あわよくば小法師の家を乗取るつもりだつたのさ」

「へエ——」

「祐吉に罪を被ゆうきせるように仕組んだのはそのためさ。ところが、

甲子太郎が一番先に縛られて、こいつは思いの外だつたかも知れないが、どうせ納戸に二人で居たんだから、許されるに決つていると高をくくつて居たのだろう。太い女だよ」

「左太松を殺した細工は」

百物語

「二階にいる小僧の宮次に、面白いことをするからとか何とか言つて、綱の先わなへ罠こしらを拵えて下げさしたんだ。それから合図を定めて、幽霊が出て少し経つと、小用こように行く様子をして、そつと納

戸から部屋に戻り、真っ暗な中の騒ぎを搔きわけて、綱の罠を左太松の頸にはめ、激しく合図の綱を引いたのだろう。二階では幽靈の腰に綱を縛つたこととばかり思い込んで、一生懸命引き上げた。当人の左太松は幽靈の身振りに夢中になつて、何の気もつかないうちに、宙に吊られたのさ」

「

「お国はそれだけの細工をすると、素知らぬ顔で納戸に帰り、一と言二た言甲子太郎と話した上、あんまり騒ぎがひどいからとか何とか言う口実で、あの部屋に戻つたんだろう。その時がちょうど、幽靈が宙に吊られている最中だ。自分が手に掛けた左太松が、

幽靈姿ゆうれいすがたで

宙にもがくのを、あの女は平氣で見ていたのだよ。恐ろ

しい人間があつたものだ

「」

ガラツ八もさすがに目を白黒にしました。

「お国はその晩のうちに、小僧の宮次をうんと脅おどかして口止めをして置いたが、万一ペラペラしやべられると大変だから、主人祐吉の供で出たのを途中から誘さそい、危うく殺すところへ間に合つたのだよ」

「」

百物語

「始め祐吉ばかり疑つたのと、女の手での細工が出来ないと思

い込んだのが此方の手落ておちだつたよ。二階の小僧を使つたとは思ひもよらない』

「なる程ね」

「とにかく、イヤな捕物だつたよ。人間らしい奴は一人も居ねえ、理三郎は別だが——」

平次は悲しそうでした。悪人ばかりの中で仕事をして、誰の足しにもならないのが腹立たしかったのです。

「でも甲子太郎に家を継がせてやつたじやありませんか」

とガラツ八、少しばかり慰なぐさめ顔です。

かるようじや、あの家を持つて行くのもむずかしかろう

「でもお小夜は可哀そうですね」

「そうだ、あの女は可哀想だ、悪い亭主を持つた女の気の毒さを
一人で背負しょって居るような女だ」

平次はつくづくそんな事を言うのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でありますので、底本のまとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩　柚月

百物語

初出——「錢形平次捕物百話」第八卷　中央公論社　昭和十四年六

月二十八日発行

底本 | 「錢形平次捕物全集」第五卷

河出書房

昭和三十一年七

月十五日初版

編集・発行 錢形俱楽部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>